

保育内容（健康）の授業展開に関する検討

岩城 淳子 ・ 嶋崎 博嗣

はじめに

保育内容（健康）は、従来1年次を対象とした半期の必修科目で、乳幼児の健康についての知識の獲得を目的とした講義中心の授業であった。しかし、2000年度より通年科目として2名の教員で担当できることになり、講義に加えてはじめて、学生による健康教育活動の立案と発表を取り入れ、ティームティーチングを試みた。ここでは、年間の授業報告とこれからの授業が目指していく方向について考えてみたいと思う。

I 目的

乳幼児の健康状態は、ここ数十年の社会の著しい変化に伴い、あまり望ましくない方向へと変容しており、その現状、問題点などが数多く指摘されている。一方、本学の学生は入学から2年間という短期間の後、保育士、幼稚園教諭として子どもや保護者に接することになる。毎日の保育の中で直面する子どもの健康問題に対しては、たとえ多岐にわたる健康問題についての様々な知識を持っていたとしても、具体的な手だてを持っていないとその対応は難しい。そのためにはまず学生自身が問題意識を持ち、自分自身の健康観を確立するとともに、さらに現状を的確に把握する能力と保育場面を想定した実践的なコミュニケーション能力を高めることが必要となる。この授業では、知識の習得に加え、それらの能力を授業過程で獲得することを目的とした。

II 方法

対象学年は1年次、132名で通年26週の必修科目である。

教員2名による全体授業・8回と、2クラス（66名ずつ）の講義・18回の2本立てで構成した。年間の授業計画を以下に示す。

前期

1	オリエンテーション（教員によるサンプルプレゼンテーション）		
2	講義 1	発育発達の概要	他のクラスは講義 I
3	2	データの見方、捉え方	II
4	3	現代の子ども	III
5	4	生活環境の変化	IV
6	5	心身の健康	V
7	グループワーク（健康教育活動研究計画書作成指導）		
8	I	保育者の健康	1
9	II	保育活動への反映	2
10	III	健康情報	3
11	IV	社会的健康	4
12	V	健康科学の知見	5
13	グループワーク（研究計画書提出、レジメ・発表資料作成指導）		

後期

14	講義 6	マッピングによる食生活の見直し	VI
15	7	食を考える	VII
16	8	コンセプトマップによる健康行動の見直し	VIII
17	9	自分の健康生活を振り返る	IX
18	グループワーク（発表に向けた具体的な打ち合わせ）		
19	VI	基本的生活習慣	6
20	VII	生活リズム	7
21	VIII	安全教育	8
22	IX	野外活動	9

23～26 グループ発表（6グループ×4回・全24グループ）

1グループ15分間（発表10分・質疑応答5分）

各講義の終了時には、講義内容から生じた疑問点を必ず記述させ提出、翌週にフィードバックした。前期提出の研究計画書には、以下の5項目を記入させた。項目は、テーマ、問題意識、乳幼児の実態・現状、健康教育活動のねらい（目的）、展開方法（対象・設定場所・設定時・活動内容）である。発表グループは教員指定で5～6人編成の計24グループである。

Ⅲ 結果

1) 発表テーマと活動形式および対象について

家庭での子どものストレス	家庭便り	親
食物アレルギー	ペープサート	子
小児肥満	風船遊びゲーム	親子
サイレントベイビー	季節別イベント計画	親子
乱暴な子	絵本と話し合い	子
肥満児	クッキングとレシピ	親子
運動する楽しさを知ろう	話と創作ダンス	親子
子どもの肥満予防について	追いかけて玉入れ	子
キレイやすい子どもの心	色紙による感情表現	子
いじめ	ペープサート	子
食生活・食品添加物	手作りおやつを紹介	親
運動不足による肥満児への対応策	園内での散歩	子
子どもが喜ぶ運動遊び	電車ごっこ	子
食生活の改善	創作紙芝居	親子
野菜に親しませるには	野菜料理の紹介と替え歌	親子
自然に体を動かしたくなるような遊び	四季の自然遊びの提案	子
アレルギーの治療・乾布摩擦と腹式呼吸	替え歌と創作体操	子
子どもの心の健康	パソコン講習	親

正しい歯の磨き方	模型を使った歯磨き講習と 丈夫な歯を作るお菓子作り	子
小児喘息	お話と体操	親子
生活リズムとは何か	保護者会での話	親
栄養を考えた料理のレシピ紹介	ペープサート	子
太るって肥満なの	家庭便り・パネル	親
健康便りで伝えるアトピー性皮膚炎	家庭便り	親

1つの発表に2つ以上の要素を含むものもあるが、全体の傾向は以下のようになる。

テーマとしては、肥満に関するものが最も多く、その原因と思われる運動不足、食生活の乱れを含めると、全体の半数の12件となった。ついで多かったのはいじめ、ストレスなど心の問題とアレルギーである。ユニークなところでは、登園時に園児が自分のカレンダーに今日の気分を表す色紙を貼り続けることで、自分の心の状態を客観視する機会を提供する試みや、親の過干渉、過保護を問題に、子育て以外の活動への興味を湧かせる試みなどがあげられる。

活動形式としては、運動遊びなどの「からだ」を使った活動が最も多く、料理のレシピ紹介や親子クッキングの計画、家庭向けのお便り作成、パネルやペープサートの作成のほか、ダンス、手遊び、紙芝居、絵本などのオリジナル作品がみられた。なお、半数以上の15件が発表時に資料を用意した。

対象は、子ども向け11件、親子向け7件、保護者向け6件である。

2) グループ発表の得点と学生の感想

評価の観点は、レジメ、発表資料、プレゼンテーションの3点である。得点は、各教員10点ずつに、他の23グループからの10点満点の得点の平均を加えた30点満点とした。発表日別に6グループの得点の平均点とSDの推移は18.33±4.97 → 16.67±2.42 → 20.83±4.50 → 20.17±4.12 となった。

学生からの感想で最も多かったものが、自分の意見を持つことの重要性、相手の立場になって物事を考える必要性、達成感、次の課題につなげる必要性を持ったことである。

IV 考察

講義では、前期は学生の問題意識を掘り起こすこと、後期では自身の健康観の確立を目標にした。これは将来ハウツウ的な健康教育活動を超えて、根底に保育者として何に疑問や問題を感じ、それをどうしていきたいかというビジョンを持てることが大切だと思ったからである。

実際、学生はいくつかの問題意識は浮かび上がるものの、その中で優先順位をつけ焦点化していくプロセスが難しかったようである。次に実態把握に関しては、こちらの予想を超えて最も難しさを感じたようで、グループ間に大きな差が生じた。情報収集など含めたスタディスキルの向上には、今後授業の中やほかの科目でも系統だった指導が必要と思われた。また表現方法には、学生自身のこれまでの生活体験が大きく影響することがわかり、これから少しでも豊かにしていくためにはより多くの実践の紹介が必要と思われた。今年度2年目に入ったこの授業では、1回目の授業に2年生によるデモンストラーションを加えた。また、年間を通じての活動では指定されたグループ内のコミュニケーション、協力体制も大きな要素になった。

グループ発表後は教員からの講評、フロアからの質疑応答を行った。これは前述の発表得点の推移を見てもわかるように、回を重ねるごとに非常に充実したものになっていき、プレゼンテーション能力の向上と物事を見る視点の育成に役に立ったのではないかと思われる。今後は全グループ発表の後に総括討議の時間を設けることも有用かと思われる。

幼児教育科学生は、1年次後期授業終了から2年次夏休みまでの7ヶ月間に4回（2002年度より5回）の現場実習が続く。実習をさらに有意義なものにするためにも、事前に自分の表現したことが相手に伝わったという体験、さらに伝わるとは限らない体験が必要であると思う。

現代社会のニーズに対応して、保育士、幼稚園教諭に要求される能力も多様化している。しかし2年間でそのすべての要素を身につけることは不可能に近い。むしろ学生生活の到達目標は、仕事をしていく中で成長していくことのできる人材の基盤を作ることではないかと思う。健康教育という領域は、比較的導入しやすい身近な分野であると同時に、複眼的視点を持たないと平板なものに終わりがちである。これからの授業形態として、複数の意見を参考にできるチームティーチングと学生の実感を伴う体験学習も必要ではないかと思う。この点は今秋の全国保育士養成協議会研究大会においても指摘されていたことである。これからの乳幼児の健康生活は、ますます急速な社会状況の変化や価値観の多様化によって、さらに大きく影響を受ける可能性がある。その中であっても、バランス感覚を持って子どもが置かれている状況と健康生活の調整役ができる資質を育むことが、これからの健康の授業に望まれていることではないだろうか。